

水環境カルテ

生活の中の水と人とのかかわりは、水道が入ってからおおきく変わりました。琵琶湖周辺におおきな変化が訪れたのは、昭和30年代のことでした。

少し年配の人たちには、井戸や川水、湖水などを生活に使った経験がありますが、それを記録として残す作業



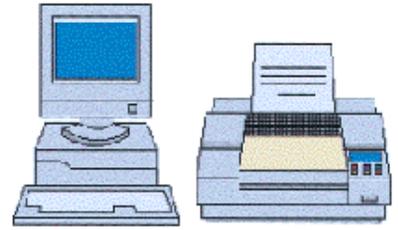
は、ほとんど行われていません。

琵琶湖博物館では平成4年(1992)から7年にかけて滋賀県内50市町村の集落ごとにこ

れらの調査をしました。(『湖人』同朋社より)

能登川町の調査は、ふるさと再発見レッツの会が担当しました。その一部を紹介します。

また、このほかの地区に関しては、琵琶湖博物館および能登川町総合文化情報センターで見ることができます。



カルテ 1

Karte 1

「伊庭の交通機関は田舟」

水郷の地伊庭は、その昔、交通機関がほとんど田舟でした。舟が通りやすいように川幅も広く、曲がりやすいように川の勾配もなだらかに、くねっていました。駐車場ならぬ駐舟場が何カ所もあったそうです。

荷物の運搬はもとより、有名な「伊庭祭り」の中の「卯の時祭り」では丸子舟に重い神輿を乗せてお渡りをしたそうです。しかし昭和50年以降の改修工事で車が通りやすいように川幅が狭まり、舟の玄関口のカワトも徐々に姿を消していきました。川に生える藻も、昔とは種類も異なり、生きる魚も、メダカとザリガニになってしまっています。(『水環境カルテレポート』より)



カルテ2

Karte 2

「長寿の秘訣は裏山の水 安楽寺」

山から流れ出る水をため、その水ですべてを賄ってきたと言う山本さんの家は、安楽寺でも裏がすぐ山というところ。ポンプを打ち込んで水は出ず^{かつすいき}濁水期の7月末から8月にかけては200m程離れた畑の中の溜水(これは年中枯れなかった)まで水桶を担いで汲みに行くのが仕事だったという。「戦前にその水が魅力で、先代が畑を買わはったんですわ。道を隔てた下の家では打ち込んだらカナケやけど水が出たんですけどなあ……。その時期になると、よその家でも谷の向こうの川の汚い水を汲みに行きましたわ。水が無いのは寂しいものでなあ、ほんま水には往生しましたわ。20年程前に上水道がきてやれやれでした。でもうちは代々長寿の筋でね。隣やらもそうですけど、これは山水のミネラルのお陰や思うて、毎日ご飯や飲み水は全て山水を使うてます。それ以外は上水やけど昔から思うたら今は極楽ですわ。」と苦労話を語ってくださいました。(『水環境カルテレポート』より)



カルテ3

Karte 3

「福堂地区の人と水」

田井中さん宅の玄関へ行くには、路肩に車を止め、家の縁にそって細い路地を歩いていかなくてはならない。つまり、家は道路を背にして建っているのだ。よく見るとここ福堂では、道路に向かって玄関がある家はあまり多くない。

それもそのはずで、いま車が往来している道路は、以前水路だったところを埋め立てたものなのだ。30～40年前の福堂は田舟が行き交う水郷地帯で、幅1mほどの家の前の道路と比べ、裏の水路のほうはこれよりもずっと広く、舟がいまの車の役割を果たしていたのだ。

福堂では昔から、農業用水は琵琶湖からの揚水、生活用水には簡易水道があり、大きな苦労はなかったようだ。簡易水道敷設の契機は伝染病の流行であったらしく、「水路の共有が災いのもと」と考えられたのだ。

一方下水は、農村下水道事業がすでに完了しており、田井中さん宅では上下水道が完備された現代的水環境下で生活されていた。(『水環境カルテレポート』より)

